

36. わら打ち・縄ない

秋の取り入れの一連の仕事が終わるとわら仕事の季節。納屋はわら打ち・縄ない・むしろ織りの作業場だった。縄ない機は全国的に使われ、縄の太さで数種類あった。

秋しもたら、わら仕事

秋しもたら（稲の取入れの一連の仕事を終えたら）納屋で縄ない、むしろ打ち。

「今日はどこそこの納屋で」と年寄りたちは集まって縄ないをした。綿の木（綿の実をとった残り）を焚いて暖をとって、世間話に花が咲いた（別府）。

わらすぐり

A は資料カードには「千歯かなごき」とあるが、千歯扱き（カナゴキ）を改造したわらすぐりではないか。わらのシブ、ハカマを取るわらすぐりは千歯扱きの転用が多い。台木の横幅 62cm で、長さ 20cm の鉄歯が 1.5cm 間隔で 21 本並ぶ。

ヨコツチ（横槌）・わら打ち台

B は横づち。直径 12.5cm、太い部分の高さ 15cm、柄も入れて全高 27cm。

C は資料カードに無名。A と同家の寄贈品なのでセットのわら打ち台であろう。丸い部分の直径 19.5cm、高さ 18cm。下の台は幅 26.5cm、奥行き 18cm で厚さ 2.7cm。

わら打ち

わらはシブ取りをして、ヨコツチでカッて（打って）やらこう（柔らかく）する。

縄ない用のわらは、全体を打つ。全体を打たないと手がやぶれる。むしろ用のわらは、カブタ（根元）の方をよく打つ。カブタと先を打って、真ん中は打たない（三島）。

縄ない

むしろ織するには大量の縄が必要で 5～6 人で縄ないをした。田の少ない家は藁を買う。16 把 = 1 束（そく）。1 人 16 把のわらを縄になる。大きな縄の手鞠ができた（三島）。戦後、縄ない機を買った（三島）。

縄ない機

D は縄ない機。奥の 2 つの口から藁を入れると縄が回転しながら巻き取られる。

細縄ない機

薄むしろの縦縄にはわらの先と根をなって縦に接ぐイッポンナワを使っていた。そのうち一本はわら、一本は木綿糸でなっていく小型の機械が出て最後はそれを使った。糸は輪になった太手の木綿糸を管に巻きとっておき、わらだけ入れればよかった（千里丘）。

E はその薄むしろ用の細縄ない機であろう。幅 38cm、奥行き 31cm、高さ 82cm。

